

ナシヨナルの歌を、また無理やり思想教育をされ、私
たちには理解のできるはずもないような教育でした。
いよいよ待ち焦がれた帰還船に乗り込んだのですが、
まだまだまされるのではないかと疑惑の念は消えませ
んでした。が、岸壁を離れるとすぐ船長の挨拶があり、
本船にはソ連兵は一人も乗っておりませんのでご安心
下さいとの言葉が、四十有余年を経た現在でも脳裏に
焼きついて離れません。

キリエの寒さと飢えに闘って

新潟県 小山 九 藏

終戦は奉天の満州野戦高射砲第九〇大隊で迎えた。
現地召集の一等兵、毎日が戦車対射訓練の中で武装解
除。

奉天からハバロフスク、そしてチタ地区のキリエ収
容所へと貨物と白魔の中の徒步行軍。マンドリン銃に
こづかれながら、時計や万年筆、皮製品を剥ぎとられ

ながら灯りもない収容所へと連行された。

銀採掘の鉱山での強制労働の日々が襲ってくる。零下
四十度の寒気、防寒帽は夕方からは吐息が真白な氷柱
となる。目のまわりも霜柱がまつわりつく、痛いとい
う感覚である。

食糧は黒パン二百グラムくらい、岩塩親指くらい、
大豆二十粒くらい入った飯盒半分くらいのスープで、
日増しに栄養失調者がふえていった。死者も多くなっ
ていく。人間、飢えと寒さほど恐いものはないとだれ
しも思ったことだろう。

私は、満州電々公社で技師長をしていたので電気技
術者ということで、鉱山内の配線、器具の修理が帰還
までの作業であった。

裸電球を一球増しては寒気しのぎのために防寒具内
に隠し入れては暖をとり、仲間たちにもそれとなく世
話していた。

暖気をとることはできても、飢えには耐えられない。
窮すれば通ずることわざの実行をした。警備歩哨にニ
クロム線を利用した暖房器具をつくってやり「ポリシ

「ヨイ・スバシーボ」ということで、かわりに黒パンや、カルトーシカをせしめ、仲間たちと分け合つては食べていた。

歩哨から話を聞きつけたのか、ソ連人労働者が次から次へと暖房具の注文にやつてきた。多いときは月に五人くらいだったので、鉱山器具用の材料もほとんど使いきってしまうほどだったが、かわりに黒パン、たばこ（マホルカ）、サハラ（砂糖）が手に入り、坑内作業の仲間と灯りを暗くしては食べ合つた。

歩哨も見えて見ぬふりでいてくれたのが、命あつて帰ることのできた最大の原因だったと思う。

しかし、坑外での運搬や坑木材作業者は厳しい状況でノルマ達成も至難の様子だった。

わずかばかりのパンや砂糖を所内に持ち帰ってやることのできたときは、我れ先きにと飛びついてきて奪い合うのだった。

飢餓道とはまさにこうした状態ではないかと痛感するのだった。

冬を過ぎ、春の水解け期になるころは、入所人員千

三百人が二百五十人減つて千五十人という悲惨な状態であつた。

ほとんどが栄養失調症で死亡者百五十人、入院者百人と大隊長の話であつた。

シベリアの夏は春と一緒にやつてくる。そのころに流行するのが銀鉱山特有の鉱害による鉱山病である。採掘粉じんが肺や内臓を冒す病気である。薬は全くない。ゼイゼイと喘息のようになり、みるみるやせ細つていく顔面が青白く気味悪い、手足が動かなくなる恐ろしい病気だ。毎日のように倒れていく数がふえる。

鉱山労働も思うにまかせなくなつたのか、ソ連軍将校がやつてきて、收容所長と何日かの話し合いが行われたようだ。

そうしたことが何回か繰り返された二十二年も夏の終るころだったと思う。

所長から大隊長呼び出しがあり、帰つてきた大隊長が「帰れるぞダモイだ」と大声でどなり歩いた。

「うそーッ」何人かが叫んだ。無理もない、ダモイトウキョウ、スコーラダモイと言われながらだまし続

けられてきた私たちだったから、しかしその言葉にうそはなかった。

ナホトカで高砂丸のタラップを登り、迎えの日本人と会い、タラップが取り外されて船が岸壁を離れたのだ。「バンザイ」思わず居合わせた仲間たちと手を取り合って涙を流し合った。望郷二年余、舞鶴の様を目にしたとき、ソ連の方向へ思わず合掌したのだった。

シベリア抑留記

岐阜県 梶田 利男

黒河山神府第九八四部隊戸沢隊に入隊したのは昭和二十年五月二十二日、北海ではまだ朝は霜柱の立つ寒さでした。でも北海の夏はすぐやって来る。初年兵の訓練は我々輜重隊だから馬の世話だけ、他の兵科と違うところでした。一人一頭ずつ受け持って、私の馬は「秋月」といって、あとびきするくせのある馬で苦勞しました。毎日馬の寝わら上げから馬糞の始末等、そ

の上班長や古兵の世話まで忙しく、疲れる毎日でした。七月の初旬に演習ということで師団の大移動で、チチハルに向けて一か月の行軍をしました。これが対ソ戦の準備などとは下級兵士の我々にわかるわけはありません。

八月一日チチハルに到着、その夜一服する暇もなく転属命令です。第三七三四五部隊挺身大隊へ行きました。今度は歩兵になり戦車攻撃の訓練中、八月九日対ソ開戦となり、直ちにハルビンに移動しました。

八月十五日、終戦の詔勅をハルビン学院の廊下のラジオで聞きました。よく聞きたれなかったが、日本が連合国に無条件降伏ということであったようです。見習士官は床をたたいて泣きました。我々下級兵はわからぬままに、とにかく命は捨てなくてすむのかなと安心したり、反面これから先どうなるのか不安でした。すぐ原隊の駐屯している富士高等女学校へ戻りました。

次の日ハルビンでの市街戦の配置にりましたが戦闘はなく、ソ連軍に降服、ハルビン競馬場で武装解除、